

千里ニュータウン新再生指針意見聴取会議（平成29年度第2回） 議事概要

1. 日 時：平成29年11月10日（金）9：30～11：30
2. 場 所：豊中市千里文化センター「コラボ」3階 第1講座室
3. 出席者：
加藤晃規委員、澤木昌典委員、岩田三千子委員、吉永恵子委員、春貴勇力委員、奥居武委員
片岡誠委員、寺脇和雄委員、太田博一委員
4. 議事次第
 - (1) 資料説明
 - (2) 意見交換
5. 議事概要

■第1回意見聴取会議 委員意見について

○資料説明（事務局）～資料1

■新再生指針の方向性について

○資料説明（事務局）～資料2

■千里ニュータウンの現状について（前回資料からの追加内容）

○資料説明（事務局）～資料3

■意見交換

○会長

- ・（事務局から説明のあった資料2は）21項目の追加・拡充項目があり、その中で、4つの特に重視する項目を見直しの柱としたいという案だが、それでよいか。また残りの17項目は、「再生に向けたニュータウンのあり方」などの各項目の文章の中で変えていきたいという提示であったと思う。（私としては）特に重視する項目は、意識しないとあまり伝わらないように感じているが、質問や前回意見したことが入っているか等も含めて意見をお願いしたい。

○委員

- ・『4. 再生に向けた千里ニュータウンのあり方』「(5) 子育て・高齢者にやさしいまちのあり方」という表現をひと目見た時に、なぜ障害者や外国人が入らないのか気になった。「(3) 都市基盤のあり方」で『人にやさしい都市基盤の整備』と書かれているように“人にやさしい”という表現の方が良いのではないか。それとも重点的に高齢者にやさしい（まちとする）という意味なのか。
- ・外国人に関して、「(6) 文化と交流のあり方」の『新しい文化の創造』の中で「国際交流」という言葉があるが、今はそれよりも「多文化共生」という視点が入らないといけないと思

う。今後が増えていくだろう外国人市民との関わりについての記述を含めることも必要だと思う。

- ・“みどり豊かな”という言葉がたくさんあるが、“みどり”というと植物だけのイメージがある。千里には、野鳥やホタルなどもいるので、(植物だけでなく)動植物の視点を入れてはどうか。例えば、“自然豊かな”という表現の方がしっくりくるのではないか。
- ・千里ニュータウンは元々ベッドタウンで、どうしてもそのイメージがあり、「働く」という視点が前に出てきていない印象である。住む所と働く所が自分の生活圏内で完結するような暮らし方が今後重視されると思う。このままベッドタウンとしてのまちなかでも良いのか、「働く」という視点は入れなくてもよいのか気になった。

○会長

- ・「(3) 都市基盤のあり方」に『ひとにやさしい都市基盤の整備』とあるのであれば、「(5) 子育て・高齢者にやさしいまちのあり方」についても「障害者」や「外国人」を含める表現をした方が良いのではないかという指摘について、事務局から説明はあるか。

○事務局

- ・「外国人」「障害者」も含めて“人にやさしい”という視点を色濃く反映させていきたい。
- ・“みどり豊かな”という表現も、野鳥や昆虫類も包含する形で捉えていきたい。
- ・「職住近接」という考え方も大事ではあるが、静かな居住環境を維持しながらショップやオフィスを導入するようなバランス(も考える必要)があるので、地区センターなどで職の機能を強化できれば良いと思う。また、「(5) 子育て・高齢者にやさしいまちのあり方」に関連して、子育て支援等の機能の充実ということを考えると、保育所(の新設)など、それ自体が職の一つになるので、そのような点でも強化出来れば良い。

○会長

- ・“自然”というのは、理念として分かるが、千里ニュータウンは人工都市であり、“生の自然”ではないという事は留意すべきではないか。日本には“中自然”という考え方があるように、住民が安心して生活できるレベルの共生という限定(的な考え方)も必要になると思う。(希少な野生生物の)データブックに載るような自然があるわけでもないのに、生物多様性という考え方を持ち込むべきだろうか。むしろ千里ニュータウンは、庭や公園のような自然が求められている気がする。

○委員

- ・“みどり”の話があったが、千里ニュータウンでは、畑や田んぼなど、生きるために必要な自然の使われ方が見られないが、今後もしない方向なのか。農業は職につながると思う。

○会長

- ・畑というのは家庭菜園的なことを指しているのか。

○委員

- ・農地があれば、採れた野菜を使ったカフェなども出来るかもしれない。畑が近所であれば主体的にまちと関わることができ、「自分の居場所」にもなり、また採れた野菜を料理して食べることで、自分たちの力で生きていくということにもつながると思う。
- ・最近ニュースで、親の介護を機に九州へUターンしたが、村八分にあってしまったという例があった。千里ニュータウンは、そのようなことと真逆の恵まれた環境だが、(なぜ農地が無いのかを考えてみると)もし農業を始めた場合、自分勝手なことを言えない農業の雰囲気になり、色々な人が自由に意見を言える風潮が損なわれてしまうので、農地を作らなかったのかなどと想像した。

○会長

- ・ニュータウンの出自を問うような話だと思う。農的生活における自然との共生を問う意見だと思う。

○事務局

- ・府内には、いくつものニュータウンがあるが、泉北ニュータウンでは、周辺の市街化調整区域の農空間と連携した取り組みが芽生えている。しかし、千里ニュータウンは基本的に宅地としての利用を考えた事業により開発され、周辺を含めても農地はなく、中々(農との連携は)しづらい面もある。一方、彩都では元々周辺に村があり、新住民との交流が行われている。

○会長

- ・ここで思い切って、将来像の中に農地の創出等に関する記述を検討してみるのはいかがか、という意見であった。

○委員

- ・土地利用や地価から考えると、千里ニュータウンの中に農的空間を取り入れるとしたら、公園の中に農的風景を再現するしかないのではないか。今までで考えると、千里北公園では、過去に参加型で畑をつくる試みがあり、農的利用が一部で取り入れられてきた。多摩ニュータウンでもそのような取り組み(多摩市・鶴牧西公園など)があったと思う。
- ・ハワードの田園都市論に立ち返って考えると、農地と働く場をセットにして、自給自足で生活ができるというダイヤグラムが描かれている。しかし千里ニュータウンは住宅都市として始まり、後から新千里西町に業務機能などの働く場や機能を入れてきたが、土地利用(の経緯)から考えても農地を導入するのは難しいように思う。ただし、住民目線で考えると、家庭菜園などを親しむ小さな空間の創出は、今後空き地などが出てくれば(つくることのできる)余地があると思う。

○委員

- ・新千里北町の北丘小学校では、校庭が地域に開放され、菜園ができています。菜園ができたことで、自然と子どもたちやお年寄りが集まり、作物づくりや収穫祭などが行われ、世代間交流が生まれている。農業とまではいかなくとも、身の回りのみどりの空間を、自分たちで手入れすることで、交流ができると思う。

○会長

- ・年寄りだと、農業の大変さも分かっているので、趣味程度で良いかという話になってしまう。元々の田園都市論の考え方は、農地を周辺に抱いた農的生活と都市的生活、2つの魅力があるというコンセプトだった。「21世紀を先導するニュータウン」とするなら、そのようなコンセプトに立ち返ってもよいかもしい。

○事務局

- ・府営住宅では、かつて居住者が敷地内で畑を作る「不法耕作地」が問題になったことがあり、花を植えることは認めようという流れになり、自治会で花の会などがつくられコミュニティづくりの一環となった。他に **UR** 団地では畑（埼玉県三郷市・みさと団地、他）や水田（東京都町田市・山崎団地）を作った事例もあるようだ。

○委員

- ・温室を作って野菜を作っている事例（福岡県宗像市・日の里団地）もあったと思う。

○会長

- ・阪神・淡路大震災後に復興のシンボルとして、中庭に畑を作った団地再生の例（兵庫県芦屋市・南芦屋浜団地）もあった。農業を押し出すというよりも、園芸程度ならば表現として受け入れやすいのではないか。

○委員

- ・〈追加・拡充項目〉『⑦団地の建替えは、引き続き「まちづくり貢献」を視野に展開』とあるが、建替えが前提となっている事が気になる。**UR** 団地では中層棟は当面建替えをしない方針がでていたと思う。「(2) 住宅・住宅地のあり方」に『集合住宅の更新とまちづくりへの貢献』とあるが、「更新」という言葉は、建替えだけを指すのか、それともリノベーションも含まれているのか。
- ・戸建て住宅について「(2) 住宅・住宅地のあり方」に『戸建て住宅地の環境保全』とあるが、環境保全という表現では守る方にばかり考えが行き過ぎているように思う。保守的ではなく“再活性化”というところまで踏み込んで、根本的に考え直さなければ、この先もたないと思う。特に、駅から離れた戸建て住宅地は千里ニュータウンといえど、今後 **10** 年すらもどうなるか分からないと思う。
- ・“先導性”という点を強調しているのは良いと思うが、資料にある「イノベーションの促進」

とは何のジャンルになるのか。今後公共システムなどが大きく変わっていくことを考えると、ジャンルを限定しないでおくのも良いかもしれないが、どうか。

- ・前回「“カッコいい”まちとはなにか」という議論をして、後日改めて考えたが、先導性とデザイン性の2つだと考えた。千里ニュータウンは先導性だけでなく（建物やまちなみの）デザイン性も優れていたはずで、その部分が希薄になってきていることが気になっている。ビジュアルに訴えかけるような内容をもう少し反映させたい。

○会長

- ・集合住宅の「更新」について、建替えだけなのか、リノベーションまで含むのか。

○事務局

- ・団地の「更新」について、当然建替えの団地もあるし、リノベーションして長く使い続ける団地もある。「(2) 住宅・住宅地のあり方」の『多世代が住まう住宅の供給や住み替えの視点』の中で、公的賃貸住宅等のリノベーションということも追記しており、若い世代の住宅という点をなんとか取り組めたらと考えている。
- ・戸建て住宅地の環境保全について、地区計画を定めている地域は、そのルールを尊重すべきだが、若い世代にとっては千里ニュータウンの戸建て住宅の価格が相当高いと思うので、例えば、建物のデザインや生け垣の統一、街区全体の無電柱化などのデザインという視点も入れて、(若い世代を呼び込む取り組みを) 検討をすることも考えられる。具体的な取り組みについては、協議会で今後議論していきたい。
- ・「イノベーションの促進」については、自動運転技術など日進月歩であり、3年後はどのような社会になっているのか、どのようなことが千里ニュータウンで実現できるか分からないという状況もあるため、指針においては現在の書きぶりとしておき、具体的な取り組みについては今後検討することとしたい。
- ・デザイン性については、戸建て住宅地の住環境も大事だが、例えば千里中央の地区センター再整備の検討では、サインの統一などの議論も行われているようなので、今後デザイン性という点は考え（を深め）ていきたい。

○会長

- ・かつての千里ニュータウンは、緑豊かなインフラの中に、モダン住宅などの団地が壮大に存在している様がかっこよく、また新たな生活様式がある点もかっこよかったのだと思う。景観はデザインに直結するが、団地が建替えられて新しくなれば、高さやボリュームが少し大きくなるが、建築的にいえばかっこよくなるものだと思う。

○委員

- ・私は必ずしも、建替えればかっこよくなっているとは思わない。

○会長

・建築の材料や、見え掛かりなど、公団住宅の小さくて“がちっとしたもの”が良いというのはレトロを評していることであり、現在の方が明らかに建築的なパフォーマンスは上がっている。団地を更新すれば、デザインがかっこよくなるという期待はあるので、かっこ悪くなることは避けたい。ただ、建替え等で居住性を向上させることは大事である。

例えば、東京の表参道の同潤会アパートの建替えの際にも議論があったが、建替えられた建物にはそれなりに人が入っており、その隣には従前建物が記念碑的にある。新旧比較してどちらに住みたいかと聞けば、古い方に住みたいという人は相当なへそまがりだろう。まちを歩いている人にとっては、どちらもまちなみとしては良いと答えると思うが、新しいニュータウンのデザイン性という観点では、建物の更新はした方が良いと思う。

○委員

・「(6) 文化と交流のあり方」の『新たな文化の創造』の中で“インバウンドの高まりに対応”という表現があるが、「インバウンド」の高まりには関係なく「多文化共生」という観点は重要だと思う。今後も続くか分からない「インバウンド」現象を新再生指針の中に入れるのはどうなのか。

○会長

・「インバウンド」というのは、言葉通りに受け取れば良いのか。それとも、外国人教師や留学生がニュータウンに住むということも想定されているのか。

○事務局

・少し表現が行き過ぎていたように思うので、「インバウンド」という表現は改めて検討させていただきたい。

○会長

・「インバウンド」という言葉には来街者という意味もあるが、将来的に住みたいと思う人も含めて使っているようにも私は感じている。

○委員

・資料3のP.2に「サウンディング型市場調査」という言葉があるが、これはいわゆる「提案型の事業コンペ」のことを指しているのか。

○事務局

・民間事業者との連携を考える時に、意見を聞き取りながらどういうことができるか考え、また需要等も聞きながら進めることが重要だという意味で書いている。そのような多様なパートナーシップを組むという視点が大事だと考えている。

○委員

- ・地元住民の意見やアイデアを聞くというプロセスが含まれているのか。

○事務局

- ・住民の意見を直接伺うことは今のところ考えていないが、千里ニュータウンの場合は地域の実情をふまえた事業とするため、吹田市や豊中市と協議しながら府営住宅等の建替えを進めているところである。

○委員

- ・もう少し積極的に意見を聞いたり、アイデアコンペをするような取り組み等があれば良いと思う。

○会長

- ・千里ニュータウンの場合には、地域の意見を反映するスキームがあるようだが、それ以外の一般的な事業の中でもそういう仕組みがあったほうが良いということか。

○委員

- ・団地の建替え時などで、地域住民の意見を反映するプロセスがあっても良いという意味である。

○事務局

- ・吹田市・豊中市と協議して建替事業を進めているが、住民個々に意見を聞くようなプロセスを生むまでには至っていない。

○事務局

- ・豊中市では、府営新千里北町・南町団地の建替え時に、市と府が連携してまちづくり基本構想を作成し、結果的に高齢者施設の導入を計画に盛り込むことができた。住民に細かなヒアリングを実施することは難しかったが、庁内の担当課などから地域課題を集め、民間事業者と連携し、施設の導入を条件づけることができた。ただ、基本構想はたたき台の段階で市民説明会を行っており、(寺脇委員が)イメージされているコンペというよりは、ある程度出来た計画を市民に見せるという形ではあった。

○委員

- ・ある程度計画が固まった段階で説明すると、市民側に意見があっても、実際には戻りづらいのではないかと。

○事務局

- ・総論的に言うと難しいが、できるだけ市民の意見を聞きながら、まちづくりを進めていければ良いというのは確かだと思う。

○会長

- ・団地の建替え時のプロセスに住民参加・地域参加をさせるのか、建物用途の検討時から参加してもらうのか、それとも土地利用の段階から議論をするのか、どのような段階で住民と議論するプロセスを入れられるのかという意見だと思う。

○委員

- ・事業コンペの際に、行政は事業の要求水準書を作ると思うが、その中で要求する建物の機能について住民と相談する機会を作った方が良いのではないかと。現状ではそのプロセスが抜けているように思う。

○会長

- ・税金を使った事業になるので、行政としては特定目的のための一定の予算を支出するという前提条件をにらんだコンペの内容を作らざるをえないと思う。そのため、事務手続きの部分にゆっくり時間をかけ、地域の人々の意見を取り入れられる仕組みをつくるという視点を〈特に重視する項目〉『d)多様な組み合わせのパートナー促進』の記述の中に取り入れるべきという意見のように思う。

○事務局

- ・要求する機能を検討する際に、住民の意見を反映すべきという意見もあるが、その手段が中々ない。通常は、事業について市民にお話をするだけになってしまうが、千里ニュータウンには再生連絡協議会があるので、各市と地域課題解決のための機能について議論する中で要求されているものを事業条件として設定する仕組みになっている。ただ次のステップとして、資料にあるように住民と一緒に「(快適に住めるという視点での) まちのマネジメント」をするという点を考えると、住民の意見を汲み取る仕掛けについても一度議論する必要があるように思う。

○事務局

- ・建替え時においては、活用地に地元の人達が望む機能をどのように導入するかという議論は、府の議会でも行っており、課題ではある。吹田市ではラウンドテーブルという場もあるので、できるだけそのような場を活用しながら住民のニーズを汲み取っていければと思う。一方、行政が入れたいと思った施設の導入に対して、住民から反対されることもあったので、お互いの合意をもってまちの活性化を図ることが重要だと考えている。

○事務局

- ・豊中市と同様だと思うが、住民がどの段階で、どの内容で参加できるかがポイントだと思う。吹田市には、大阪府などが建替え事業をする時などに議論をするコミュニティの場があるので、いつでも、興味あり次第、住民の方から声をあげてもらえば議論が始まると考えている。市は住民にとって最前線で、府などに住民の声を伝える役割があるので、意見があれば市によせていただきたい。

○会長

- ・地元自治体としては、建替えに関して、住民サウンディングのしくみが既にあるということだが、その上で何を充実させていくかという点で指摘があった。やはり時間をかけて議論していくことが大事だと思う。公団住宅は、比較的に自由な資金で事業を行っているが、公営住宅は税金が入っているので、色々な人の意見があり、一つの団地の建替えの度に議会ではかるのは大変かもしれない。そのような中でも情報公開し、地域コミュニティのためにどうするか、これは地域ごとの問題で一般論では片付けられない。その中で、『多様な組み合わせのパートナー促進』をぜひ考えていくんだということを書き込んでいただければと思う。

○委員

- ・文化や住宅のハードなどについては、資料に色々と書かれているが、最終的にどのようにコントロールするのが一番大切だと思う。「(7) ニュータウン再生の推進体制のあり方」に新たなことも書かれているが、地域で地域のことを調整する体制を早急に作る必要があるのではないかと。指針を考えて推進する人たちがまとまらないといけないと思う。千里ニュータウンは、豊中市と吹田市で市域をまたいでおり、分断されているので、地域の人々の声が聞き取れていないと思う。地域マネジメントは組織が立ち上がれば良くなると思うので、体制を具体化できるようにしてほしい。「住民・事業者・行政を含めた組織を設置する」など、もっと前向きな記述にした方が良いと思う。
- ・資料3の **P.4** に所有関係別住宅種別戸数推移が示されているように、**H17-H29** で住宅の所有関係が劇的に変わり、民間分譲マンションが約 **3** 倍の戸数まで増えた。これから先、分譲マンションの管理をどうするか、それにより地域・行政がどういう影響を受けるのかという点についても、指針に入れるべきではないか。現行指針では、多様な方々に住宅を供給するというを示していたが、公的賃貸住宅が減り、分譲マンションが増え、住宅全体のバランスが崩れてきているように思う。このままの方向ですすめるのか、それでよいのか。新再生指針では、その見直しが考える基の一つにならないといけないように思う。

○会長

- ・この指摘については大問題だと思う。**50** 年前、千里ニュータウンがつけられた時は、年間 **5,000** 戸を目標とし公営住宅を中心に住宅を供給したが、**50** 年経った現在、国の住宅政策が変わり、持ち家が推進され、公営住宅がどんどん先細りになってきている。このような情勢の変化をにらみながら指針を作らなければならないということだと思う。

○事務局

- ・高度成長期には、地方から大阪などの都市部に多くの人が移り住んだことで、住む場所が足りず団地を作ってきた。千里ニュータウンや泉北ニュータウンは、その象徴であり、大量の社会増を受け入れるため、公団住宅や公社住宅、府営住宅が混ざった住宅団地を作ってきた。そのため、公的賃貸住宅が地域内の住宅の半分を占め、一般的な市街地と比べるとイビツな形となっていた。高度成長期も終わり、住宅が充足してきた中で、公営住宅も役割が変わってきている。以前は中堅層も入居できたが、国の政策転換により、低所得者層のための住宅、いわゆる「福祉住宅」のような位置づけに変わった。また民間賃貸住宅が作られてきたので、住宅セーフティネットも民間賃貸住宅とあわせて構築するという流れになってきた。以上のことから、公営住宅を新築するというよりは、ストック活用の流れであり、公営住宅の比率を減らしながら、若い方にも入ってきてもらうような取り組みを行ってきたというのがこの10年間だと考えている。

○委員

- ・現在は公共が多くの土地・住宅を所有しているので、建替えなどをする際には調整しやすいが、民間所有の住宅比率が高くなれば、所有者間での反発もあり、調整がしづらくなるだろう。そのことを考えると、地域のマネジメント体制を今のうちに作っておかないといけないのではないか。

○会長

- ・イギリスなどのヨーロッパでは、プライベートな集合住宅をいかにマネジメントしていくかということには歴史がある。イギリスなどの傾向としては、民間の集合住宅を社会資本に位置づけ、マネジメントのしやすさをそこに見出している。

○事務局

- ・区分所有マンションの建替えは、基本的には管理組合での議論することになるだろう。将来的な地域のマネジメントについてどうしていくのかということは、丁寧に議論して記述することとしたい。また地域住民に新再生指針の趣旨を伝える必要があると考えており、全市民に配布することは難しいが、地域マネジメントの必要性を市民に伝えることで、実効性のあるマネジメントにつなげたい。

○委員

- ・地域説明会を開き、「千里ニュータウンをより良くするためには自分達でマネジメントすることが必要だ」という話を行政から話してもらいながら、地域単位だけでなく千里全体の地域マネジメントが必要という雰囲気醸成していくことが重要ではないだろうか。

○会長

- ・エリアマネジメントは必ず負担を強いられるので、それに耐えられる合意を地域で得られるか。例えば難波では歩行者道路に広場を作るというエリアマネジメントの試みがあったが、施設の維持を各々が負担するという話になった途端、人がさっと引いたらしい。そういう意味で民度の高さが要求される取り組みではある。

○委員

- ・だからこそ、千里ニュータウンでエリアマネジメントが出来れば、先導的なニュータウンをこれからも維持していけると言えるのではないか。

○委員

- ・〈追加・拡充項目〉『⑬「先導性」のある住宅都市としての魅力の向上』の中で、「健康・医療」をテーマにしているが、ここでいう「健康」とは何か。健康・医療に関連した施設との結びつきをつくるというイメージだと思うが、住民にとっての健康とは何かを考えると、例えば公園の健康的な活用など、健康に即したデザインをする必要があると思う。「医療」というキーワードは、大阪だけでなく他の都市でも特徴にあげていると思うので、具体的に記述する必要があるのではないか。
- ・まちづくりにおいて、どのように管理し運営していくかということに対しては、日本はおざなりだと思う。住民主体で行うのか、そうであれば行政がどのようにサポートできるのか、示すことができればよいのではないだろうか。

○事務局

- ・「健康」というテーマについては、めざすべき都市像『みどりゆたかで健康に暮らせるまち』の中で、住民がゆたかなみどりを使って健康に過ごせるようにということを基本として考えている。千里周辺には健康・医療に関連する施設があり、健康や医学に関連したセミナーや講習会などが行われており、それもふまえて「健康」という言葉を新再生指針の視点として記述した。
- ・エリアマネジメントの議論としては、資金面や住民の主体性の確保、行政側から醸成する仕組みなどについて、これから丁寧に議論していきたい。

○委員

- ・確かに千里中央には、ライフサイエンスセンターなど大きな施設があるが、住民の暮らしに入ってきているだろうか。(新千里東町で行っている)東町まちかど広場では、国立循環器病研究センターで務められていた研究者が、地域の方の健康を診断した事例もある。このように千里周辺には様々な人材がいるはずなので、それらを活かしながら、住民の日頃の健康を支える取り組みができないだろうか。

○委員

- ・「みどり」＝「健康」ではないように思う。

○委員

- ・戸建て住宅地では、敷地分割がされている住宅もあり、採光や通風、プライバシーを確保しづらい面もあると思うので、そのような面から考えた基準ルールを示すことができればよいのではないか。そのような基準があれば、「健康（増進）」にもつながってくるのではないかと。

○委員

- ・一部では、緑もない狭小な戸建て住宅地に建替わっている例もあるので、モデル的にみどりのある住宅地など（をつくり）、戸建て住宅のあり方を示せないか。

○会長

- ・田園都市論の系譜を話すと、ロンドンでは環境・道徳的に悪化したまちで労働者の生産性が低下したため、資本家が郊外に労働者の環境改善のための住宅を提供した。精神の荒廃を防ぐ住宅地、千里ニュータウンに住めば心身ともに健康になったとイメージをつくることができれば良いかもしれない。

○事務局

- ・「(2) 住宅・住宅地のあり方」の『戸建て住宅地の環境保全』の中では、先程議論にあったデザイン、採光などの「健康」に関する要素の基準化、住宅のあり方を示すモデルなどの話を踏まえ、今後議論していく。

○委員

- ・千里周辺には、国立循環器病研究センター、阪大病院という先端医療があるが、先端医療というのは地域医療とセットでないと成り立たないらしい。先端医療のためには、地域医療という莫大なサンプリングデータが必要なためである。そのような意味で、国立循環器病研究センターが移転する健都と、千里ニュータウンがつながっていると捉えて（それを再生指針で）広げられないか。

○事務局

- ・国立循環器病研究センターの跡地は、民間事業者に売却する予定らしく、吹田市としても心配しているところである。このような市の想いは国に届いておらず、市としてもどのような企業が土地を取得するのか様子をうかがっているところである。

○委員

- ・再生の理念の中に、「グレーター千里」という言葉があるが、一部の方々にとっては大事な言葉だが、現行指針では少し出てくるだけで、これからの人（若い世代ら）が理解できるか疑

問。資料には「北大阪の核」という言葉もあるので、使うなら定義が必要ではないか。「健康」「イノベーション」という言葉も含めて、言葉の使い方を考え直した方が良い。

- ・「健康」について、彩都や健都などの他のまちで既に先導的な動きがあるので、千里はむしろこれらのまちと“連携”すべきだと思う。そう考えると、「グレーター千里」という言葉は宙に浮いた言葉になるように思う。
- ・めざすべき都市像『持続可能性のあるまち』とあるが、既に“再生”のための取り組みを行ってきた今、持続可能であることは前提なので、“持続し進化する”というような言葉のほうがふさわしいように思う。
- ・住宅は、公社住宅、府営住宅、公団（UR）住宅、市営住宅、などのパーツに分かれているイメージが強い。めざすべき都市像『多様な世代が楽しめるまち』とあるが、それぞれの世代がそれぞれで（勝手に）楽しむという印象を受けるので、各世代が混ざり合い交流していくところに価値があるというイメージできる表現に改めるほうがよいと思う。
- ・めざすべき都市像『ふれあい支え合うまち』について、地域のコミュニティを強化する言葉にはなっているものの、「支え合う」という言葉では“高齢化の中で支え合う”というイメージの方が強いので、よりプラスな魅力を創出するイメージを付加する言葉を入れるべきではないか。現行指針の言葉・表現を踏襲するだけでなく、アレンジしていくほうがよいと思う。
- ・「イノベーション」に対応している言葉としては、めざすべき都市像『北大阪の核となるまち』というところだと思うが、ここのイメージが伝わりにくい。イノベーション産業を誘致するのではなく、先導的な要素が住宅地全体に展開して住民を取り込んでいくイメージならば、もう少しまい表現があるように思う。
- ・「(7) ニュータウン再生の推進体制のあり方」の『自立的なマネジメント体制の推進』とあるが、「再生のプロセスのマネジメント」も重要ではないか。近隣センターなど、新たなフェーズに入っていくプロセスにおいて、住民参加型を取り入れるマネジメントが重要ではないか。

○事務局

- ・近隣センターの再生などの中でも、そのプロセスの中で住民参加を取り組んでいくことになるかと思う。現行指針の言葉に引っ張られすぎている部分はあるので、再検討する。

○会長

- ・「グレーター千里」という概念は、周辺との連携の中で出てくるイメージで、初めからあるポテンシャルではないので、この言葉に期待しないほうがよいと思う。「未来社会」という言葉ではなく、西暦 **3,000** 年に向けた「サードミレニアム」という言葉もあるので、参考いただければよい。
- ・民間住宅地のあり方について、ワークシェアリングなど働き方が変わる中で、住宅地においてビジネスが生まれる可能性がある。住宅地の中でどのように就労環境を持つのか考えるべきだと思う。「職住近接」は、かつての目標だったと思うが、これからは家庭の中にオフィスがあるようなことを前提としたまちづくりをしないといけない。そうなれば、コンビニがな

い、夜間（17時～21時くらい）は外が暗く安心して外に出られないという現状を考えると、夜間環境や情報環境の充実などについて考えないといけないと思う。

○委員

- ・現在の視点では、千里ニュータウンへ新たに人を呼び込むという考え方があまりないように思う。例えばIT関係の方ばかりの村を作るなど、電車で（勤務先まで）通うような発想がない人、自宅の近くで耕作して生活したい人、夜昼関係なく働いている人、様々な異業種が住めるまちなど、いろいろな人が住めるというイメージが未来型（のまち）としてあればよいのではないか。

○委員

- ・〈追加・拡充項目〉『⑩地域力・維持力を向上するため、既存の地域力の継承発展とともに、新住民・外部人材・事業者・大学等も活躍できる仕組みの構築』とあるが、実際に地域を支えているNPOなどの団体が地域で活動しやすくするための支援が必要だと思う。例えば、会合のための場所取りが大変で、スライドやコピーなどの設備も考えないといけない。シェアオフィスのようなものがあれば、地域団体にとって活動しやすくなると思う。
- ・千里ニュータウンの過去の資料が散逸しかけているように思う。高齢化する中で、資料の保管をどうすべきか考えている人もいると思う。吹田市に千里ニュータウン情報館もあるが、個人で所有している資料をしっかりと管理できる場所・体制があれば良いと思う。

○委員

- ・資料はオープンデータ化してほしい。

○事務局

- ・シェアオフィスという話があったが、近隣センターの中で（整備することも）考えられると思うので、議論していきたい。
- ・現存資料の保管については「(6)文化と交流のあり方」の『生活文化の醸成と継承』の中に“まちの資源を発掘するために市民の取組が必要”と記述したところでもあるが、それ以外にも協議会の中でどんな取り組みが出来るか丁寧に考えたい。

○事務局

- ・団地再生の中で、そのようなスペースやシェアオフィスを設けることも考えられ、実際にURや公社では検討している。団地としての魅力づけを行うことは現在も検討されている。

○会長

- ・今まで容積率100%を目指したまちづくりだったが、これからは容積率200%のまちづくりを意識せざるをえないのではないか。容積率200%のまちなみというのは“ごちゃごちゃ”しているように見える一方で様々な機能がある。そのような都市の将来像を描いても良いかも

しれない。

■次回の意見聴取会議について

- ・次回の日程は **11/20**（月）までに各委員メールで返信し、調整後に事務局から連絡。